

「遣り甲斐・働き甲斐・生き甲斐」

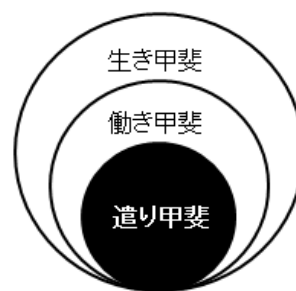
1. 「100年企業」の4代目から学ぶ

右掲は、大阪府中小企業家同友会天王寺支部の有限会社秋村泰平堂4代目の秋村敬三社長です。41才になっておられるので青年部会OBですが、積極的なリーダーの一人として若手育成に精力的な活動をされている方です。弊社の栩野将男も昨年から青年部に参加しており、秋村さん他の若い会員のパワーを受けて急成長させて頂いています。

秋村さんの会社は2021年に創業100周年を迎える長寿企業です。「ちょうちん」一筋で頑張っておられています。大学を卒業されて東京の外資系印刷機メーカーでエンジニアとして活躍されていましたが、26才の時にお母さんから「会社を継がないか」と声かけられて入社され、30才で事業承継され今日に至っていると事です。社長としての10年を振り返りながら、次の100年も展望される若手リーダーです。

その秋村さんがポツリと「おやじの働き甲斐を取ってしまった」と回顧されたのです。この言葉は今年70才になる私にはグサリと胸に刺さるものがあります。秋村さんのお父さんは「ちょうちん」＝「自分」という程の頑固な職人肌の方だったようで、代替わりして事業を家業から企業へシフトする中で若い社員やパートが入社して現場作業が様変わりした

ので「仕事」という居場所を失い、その後、見る見るうちに衰えて75才で亡くなられたとの事です。この体験談は本当に貴重です。私は、「百歳現役」を標榜していますが、三男の将男の邪魔をしないようにしながら、「仕事」としての居場所をつくる必要を痛感しています。



2. 「遣り甲斐・働き甲斐」

1月16日、私の所属支部例会で秋村さんが講師として話された訳ですが、その話を受けてテーブル討論で「会社永続のために挑戦していることは？」というテーマで話し合うことになったが、この例会に大阪市大・本多ゼミ生が加わっていて、私がテーブル長を務める班では半数以上が学生という状況だったので、テーマを「楽しんで仕事する」に切り替えて討論を始めたのです。「仕事」を「活動」と置き換えると共通になり、学生さんの意見もシッカリと出て来たのです。

この流れで討議を進めたら、ある学生が「仕事はお金儲けの為」と冷めた感じの意見を出されたのです。そこで、私は「仕事は人の役に立ち感謝されること」と定義したら、実家がみかん農家という女子学生が「東京から、わざわざ、実家のみかんを美味しいと感謝の電話があった」と話し、「実は、自分が長女なので跡を継ぐかも知れない」と吐露されたのです。そこから秋村さんの話にあった「遣り甲斐」という話になり、仕事でお客様が喜ばれる事が「遣り甲斐」であり、その結果、会社で認められる事が「働き甲斐」で、それを通して家族が幸せに暮らす事が「生き甲斐」という定義に発展したのです。

秋村さんのお父さんは「自分」＝「仕事」＝「ゼロ」という数式のような感じの方だったようで、秋村さんご本人も多忙で家族サービスが十分ではないと反省されていたのですが、意外にも、女子学生は猛烈に働くことを容認されていたのに驚いたのです。流石に、社会環境の厳しさを実感されているのだろうと推測します。現実的に、激しく変化する環境の中で生き残る事の実態を見ておられるのかも知れないと感じたのです。

3. 「生き甲斐」とは

私自身の話ですが、昭和48年にトヨタ系販売店に入社して高度成長期を駆け抜けたのですが、右掲は、私が担当したコンピュータもオフコンが登場して、それがバッチ処理から画面入力が当たり前になり、性能もドンドン向上して全社オンラインシステムまで発展してテレ・マーケティングまでするようになった事を表しています。そして、トヨタ物流改善のモデル店になりシステムを活用するJIT方式を構築して、そのOJTで営業所の業務改善チームのリーダーをしていたのです。

ところが、「やり尽くした感」が充満した時に、別の部署への配転辞令があり、ふと家庭を見ると長男は中2で成績も上位にいたが、次男は中1で1学期の殆どを遅刻か欠席という結果で、自分の名前をローマ字で書けないという事実と直面したのです。我が家は妻も教師していたので朝7時半には両親がいない状況が大きな原因だと気づき、会社の為にも重要な事だが、その結果、家庭崩壊になっては無意味になると考え、「社長はクルマの道、私はシステムの道」という主旨の辞表を出し、関連会社へ行ったのです。結果は、9時に出勤すれば良い環境だったので次男の登校を見届けが出来るようになり、なんとか間に合ったのです。

人生は長いので「生き甲斐」という大きなテーマは難しいですが、少なくとも、現在、長男は博士を取得して大手メーカーで研究職につき、次男は、私のお客様の東京営業所の営業職で高い評価を受けており、三男はリーマン・ショックのあおりで会社に入ってきたが、今は、システム面でお客様になくはならない存在になっており感謝されている事、さらに、長男も次男も家庭を持ち、それぞれ孫2人を産んでくれているという目出度い状況で「生き甲斐」という事を実現できたと満足しています。

私は、サラリーマン時代の退職金、貯金、生命保険など約1500万円を注ぎ込んで会社経営をしていますが、資本金300万円、事務所800万円が残り、会社への貸付金400万円が回収できない状況ですが、反面、年金も頂けるようになり個人的貯金も人並みに蓄えることができているので、ほぼ満足できる状況にあり、人生の途中決算ですが「生き甲斐」として金銭的にも収支をプラスにしている証拠と考えています。

4. 70代は実りの時代

右掲は、昨年他界された木原先生が一昨年、私に送って頂いたメッセージです。今年7月に満70才になりますが、外見上は元気そうに見えても寄る年波で身体の各所に衰えが出て来ています。そんな「不安」を抱える私に光明となった言葉なのです。「百歳現役」を標榜して、今をシッカリと歩んで行くのですが、現実として70代に臨み「七十は得ること多し」を実感する人生を歩みたいと思っています。

お蔭様で2025年大阪万博が決まり、近畿圏の経済状況は好転すると予測されますし、社内的に三男が「自立」の方向で逞しさを増しています。2025年は創業30年であり、私は76才、三男は38才になっているので事業承継も視野に入ります。銀行問題も日本政策金融公庫の道を拓いているので、資金面でも先代社長としての役割を果たしていると自負しています。これからも良いお客様に巡り会って繁栄する事で小規模事業者(5名以下)から中小企業へ脱皮して社会貢献の道を拓けて行きたいと思ワクワクしています。

